

読譜力養成における‘MuseScore’の教具としての可能性

Possibility of Using MuseScore as a Teaching Tool in Training of Score-Reading Ability

次世代教育学部こども発達学科

堀上みどり

HORIKAMI, Midori

Department of Early Childhood Development

Faculty of Education for Future Generations

要旨：本稿は、読譜力養成のためにおこなった、楽譜作成ソフトMuseScoreを使用した授業実践を振り返ることにより、MuseScoreの教具としての可能性をアピールし、器楽演習の授業において標準的に使用することを提案するものである。

最初に、読譜とは認知した音高・音価を即座に身体的運動に移さなければならない反射的行為であることを述べる。そして、読譜の方法について説明した後、就学前教育で音楽に親しみ、義務教育に音楽の授業があるにもかかわらず、なぜピアノ初心者の学生が読譜を苦手とするのか、幼稚園教育要領と小学校・中学校学習指導要領からあきらかにする。また、同様の課題を抱える保育者養成校の教員の取り組みに関する文献をレビューし、筆者の実践を振り返る。

学生の課題の取り組み結果から、MuseScoreを使った楽譜作成と伴奏づくりは、楽しみながら読譜力を育むことができる創造的学習活動であることがわかり、器楽演習Ⅰ・Ⅱの段階から継続的にMuseScoreを教具として使用することを提案する。

キーワード：読譜、MuseScore、ピアノ初心者、保育者養成

Abstract： This study explores MuseScore’s potential as a teaching tool and proposes its use as a standard tool in piano classes. Score reading is a psychological act with strict time constraints as well as a reflexive act in which the perceived pitch and rhythm must be immediately transferred to physical movement. There are two types of score-reading methods: instrumental score reading and vocal score reading, with the latter including solmization and a-b-c-dieren. Using the kindergarten education guidelines and the elementary and junior high school curriculum guidelines, I clarify why students are not good at reading scores, although they are familiar with music during pre-school education and have compulsory music classes. Additionally, I enumerate the steps taken by teachers to improve students’ score-reading abilities and also reflect on my own practice. The results of students’ efforts revealed that notation and arrangement using MuseScore is a creative learning activity that has the potential to foster reading, arranging, and musical thinking skills while having fun. I propose the use of MuseScore as a teaching tool in the future.

Keywords： score reading, MuseScore, piano beginners, childcare worker training

1. はじめに

本研究は、2021年度幼保大志会¹⁾の授業の中で、楽譜作成ソフトMuseScoreを使用し、読譜力養成のための学習活動をおこなった際のプロセスと、その結果を振り返ることにより、読譜力を身につけるための教具としてのMuseScoreの可能性をアピールし、筆者が担当する器楽演習の授業において標準的に使用するこ

とを提案するものである。

近年、保育者養成校に入学する学生の過半数がピアノ初心者である。鍵盤の「ド」の位置がわからない、指番号がどの指に対応するのか考える間を要する、ト音記号の譜表に書かれた音符も読むのに苦勞する、といった学生が多く見られる。本学において、幼稚園教諭の資格取得に必須となっている器楽演習Ⅰ・Ⅱは、左手がコード伴奏でヘ音記号の譜表に書かれた音符を

読む力は求められていないため、ほとんど読譜ができない学生も何とか単位を取得することができている。しかし、保育者採用試験では、一つ一つの音符を演奏しながら先々読むことができ、しかもその歌に相応しい音楽的表現をつけて、課題曲を仕上げるのが求められる。2020年度、2021年度はコロナ禍もあり、公立園の採用試験にピアノ・弾きうたいを課すところが減少した。しかしその中で、課すところの課題曲のレベルは上がってきていると感じる。

大地（2008）によれば、採用試験のピアノ実技試験で一番に重視されることは、幼稚園ではピアノの基礎技術と即興力、保育園では音楽性と即興力であるという。また、中野他（2012）は、幼稚園・保育園に保育の現場に必要なとされる音楽能力やピアノ演奏技術等についてアンケート調査をおこなっているが、平易な弾きうたいができることと楽曲をアレンジする能力が、まず求められると述べている。具体的には、幼児の作った歌をメロディーに替える力、子ども達が自然と集まってくるような楽しいリズムを適切に提供できる力、少量の練習ですぐに演奏できる力、難しい曲にもすぐコードをつけて伴奏できる力、アレンジ力、作曲力、移調できる力などが挙げられている（同上）。今日、音名が音符の中に書き込まれている楽譜や、音符の下に音名が振られている楽譜も市販されているが、保育者として仕事をするとき、演奏の準備段階に必要な読譜力は、あるに越したことはない。

採用試験においては、1次試験合格発表後1週間余りで2次試験という場合、楽譜が読めないことは大きなハンディとなり、ピアノが弾けないために受験をあきらめるという事態も起こり得る。課題曲発表後2～3日で譜読みをおこない、最初のレッスンでは演奏可能な速さで両手奏できる力を、器楽演習の授業で身につけなければならないと、筆者は考えている。

2021年度幼保大志会採用試験対策講座において、楽譜を読むことが苦手で、すべての音符に音名を振っている学生が半数近くいた。そこで、MuseScoreを使用して読譜力養成に特化した授業をおこなった。読譜には簡単なルールがあるだけで、五線譜に書かれた音符から音高・音価を読み取ることは、高等学校で英語や数学を学んできた学生にとって難しいことではないはずだ。しかし、入学後の器楽演習Ⅰ・Ⅱの授業を履修し終えても楽譜を読む力がついていないことを考えると、授業の取り組み方を考え直す必要があるのではないか。

本研究では、まず読譜とはどのような行為なのか簡

単に述べ、学生がなぜ楽譜を読むことができないのかを、就学前と9年間の義務教育の音楽教育内容を調べることによりあきらかにする。次に、読譜力を身につけるための取り組み事例を先行研究から紹介し、筆者の授業実践の振り返りを通して、MuseScoreの教具としての可能性を示すことが、本研究の目的である。

2. 音楽教育における読譜の位置づけと保育者養成校ピアノ教育における読譜力養成のための取り組み

2.1. 音楽教育における読譜の位置づけ

2.1.1. 様々な読譜

「読譜」とはどのような行為だろうか。端的に言えば、楽譜から音高と音価の情報を読み取ることである。しかし、中央の「ド」、ト音記号がそう呼ばれる所以であるところの第2線の「ソ」など、目印になる音から数えて読んでいるようでは、演奏に間に合わない。いかに素早く読み取れるかが重要である。

水戸（2009）によれば、「読譜」は心理的行為であり、その認知過程における固有の特徴は、継続的でしかも厳格な時間的制約を受けることであるという。決められた一定速度に従って楽譜情報を読み取り、それを身体運動に移さなければならない（同上）。つまり、楽譜を「反射的に」認識しなければならないのである（同上）。また、読譜するとき、演奏者は一つ一つの音の音高・音価を読み取りながら、同時にいくつかの音の間の関係もとらえている（同上）。熟練者の場合は、音楽経験により蓄積された音楽的知識を基に、音や和声の進行など瞬時にしかも暗黙的に予測・解釈し、積極的に楽譜を再構成しているという（同上）。しかし、読譜を苦手とするピアノ初心者は、「音をひとつずつ無関係にデジタルな情報として読んでいる」（同上）と推察される。音符の情報処理の量と速さを向上させ、楽譜を音楽的に見ながらいくつかの音の関係性を瞬時に理解するための訓練が必要であり、これは練習すれば誰にでもできることであるという（同上）。「読譜」は、まず音高・音価を見てすぐわかるところから始まるが、音そのものがイメージできなければ単なる記号に過ぎないため、音名から音がわかる、イメージできることがその前に重要であろう。

次に、読譜の方法について述べる。楽器を使って弾きながら、音高・音価がわかるだけでなく、楽譜から音楽を読み取ることを、古田（1978）は「器楽読譜法」と呼んでいる。読譜訓練の前に、その楽器で音を出せるように初歩的技術を習得する必要があり、視覚

の反射神経と楽器を扱う技術的運動神経とをより素早く働かせる訓練により、能力を伸ばすことができるという(同上)。使用する楽器は、扱いが簡単で、楽譜の音符の位置がその楽器のポジション上、視覚的に確認しやすいものがよい(同上)。

声楽の読譜法には「聴唱法」と「視唱法」があり、前者は指導者の範唱を学習者が模唱して覚える方法で、視覚的に音符を見て音楽を読み取ることは異なる。この方法は、具体的に微妙なニュアンスまで伝達することができる、視唱の前段階として幼児の音楽教育に最適である(同上)。後者は、知的認識能力を必要とし、「音名唱法」と「階名唱法」の2通りがある。「音名唱法」は「固定ド唱法」ともいい、個々の音に「ドレミファソラシ」を固定して読む方法である。この唱法では、その音符に対応する音名はすぐに覚えられ、音階におけるその音の役割、その調におけるその音の微妙なニュアンスまでは、感受・表現しにくい。例えば、ハ長調の「ド」は主音であり、中心の音である。ところが、変ニ長調の「ド」は導音で、主音の「レ」に向かおうとする性質を持つ。このようなことが、わかりにくくなるのである。

それに対して、「階名唱法」は「移動ド唱法」ともいい、その調の主音を「ド」と呼ぶ。つまり、先ほどの変ニ長調であれば、「レ」を「ド」と読む。

「固定ド唱法」か「移動ド唱法」かという議論は、長く続いているが、「移動ド唱法」の方が、感情移入や曲の構造理解が容易であるという(同上)。これに関して、尾見(2009)の事例が参考になる。指揮者として、バルトークの合唱曲を指導したとき、「臨時記号が星のようについている」(同上)バルトークの曲を固定ド唱法で合唱することは、アマチュアの参加者には困難極まりないことであるため、「移動ド唱法」を用いたという。それにより、複雑な楽譜から楽曲の美しい輪郭が浮かび上がり、「純正な和音」を響かせることができたという(同上)。その後、「移動ド唱法」を「易しく賢い鍵」として、担当する音楽の授業で実践したところ、五線譜から階名で音を取って歌えるようになってきたと報告する学生が現れたという(同上)。

しかし、「固定ド唱法」がしっかり身につけてしまっている学習者にとっては、その音名からイメージする音高が定まらないことはかえって混乱を招き、読み替えという非常に集中力を要する作業をおこなわなければならない。義務教育では「移動ド唱法」を採用しているが、それが原因で、学生に読譜力が不足して

いるのではないかと、筆者は考えている。

筆者の授業では、学生が知らない曲は、聴唱法で導入をおこなってきた。古田(1978)は、聴唱法について、幼児には向いているが「指導者に対する依頼心が強く働き、自発性が育ちにくく、学習に対する意欲は消極的」であるため、なるべく早く「器楽読譜法」に移行させるべきだと述べている。まず、筆者の授業のこの点を改善しなければならないと考える。

2.1.2. 幼稚園教育要領と学習指導要領における読譜

なぜ楽譜が読めないのだろうか。五線譜に書かれた音符の音高・音価の表し方に関するルールは、それほど複雑ではない。学生は十分理解して覚えることができるはずである。その理由をあきらかにするために、本節では幼稚園教育要領と小学校・中学校音楽科学習指導要領を調べることにする。

幼稚園教育要領における音楽は、領域〈表現〉の中に含まれ、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」²⁾ ためにある。そのねらいは、「(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ、(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ、(3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ」²⁾ ことで、内容として「(1) 生活の中で様々な音、…などに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ、(2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする、(3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう、(4) 感じたこと、考えたことなどを音…などで表現したり…する、(5) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」²⁾ ことが、記されている。音・音楽に触れて、イメージを豊かにし、感動できる心や、感性・創造性を育むことが、就学前の音楽教育である。

幼児の音楽的発達の可能性は、(1) 音楽聴取に関して、音の大きさと音色の違いがわかり、メロディーの輪郭、音程、リズム、テンポについて概念を有し、(2) 歌唱に関して、3歳児は部分的に歌の模倣ができ、4歳になると歌全体を歌えるようになり、5歳になると調性感覚が身につく、安定して歌を歌えるようになり、模倣して歌うほかに、即興的、想像的に歌うことができるようになる、(3) リズムに関して、変化がわかり、パターンを認識できるようになる

り、リズムに同期し、自己をコントロールすることを覚える、(4) 絶対音感³⁾を身につける、である(McDonald & Simons:1999, 梅本:1999)。以上のことから、幼児期は、耳で音・音楽を聴き、楽しみ、表現する時期であって、読譜から音楽表現をおこなうことは、不適切であることがわかる。

続く小学校・中学校の音楽科において、読譜はどのように取り組まれているのだろうか。第9次小学校学習指導要領の小学校低学年の読譜に関する教育活動内容を見ると、階名読みで、教師の範唱を模唱することになっている。階名読みではその曲の調の主音が「ド」になるため、相対的音感を獲得するためには有効であるが、調性によって、その都度音の読み方が変わるため、読譜力を身につけることが困難であると推察される。中学年になると、ハ長調の楽譜を見て歌う(演奏する)技能を育て、視唱(視奏)に慣れ親しみ、楽譜と音との関連を意識し、音楽の流れを感じながら読譜できるようにすることが求められている。そして高学年では、ハ長調の視唱(視奏)に慣れてきている時期でもあり、イ短調の視唱(視奏)の技能も育てるために、楽譜と音との関連を意識した指導をおこない、音楽の流れに沿って読譜できるように指導することが記されている(同上)。

小学校の音楽における読譜指導は、ハ長調とイ短調の曲でのみおこなわれることになっている。しかし実際の授業で、児童は他の調性の曲も歌い、演奏している。その場合は、どのように読譜をおこなうのだろうか。

中学校の音楽科学習指導要領において、楽譜は「音や音楽の世界を他者と伝え合い、共有する方法の一つ」であるとされ、作曲者の意図を汲み取って音楽に対する理解を深め、他者と一緒に表現を工夫すること、またつくった音楽を記録し再現すること、音楽を言葉で説明するときの助けになることが、述べられている。そして楽譜は、身の回りや世界に存在する多種多様な音楽に対する理解を進め、音楽文化の継承、発展、創造を可能にし、生涯に渡って音楽に関わることを促すという⁴⁾。

このように、楽譜の重要性が記されているにもかかわらず、中学校の学習指導要領には、読譜に関する具体的な教育内容が見当たらない。小学校高学年でハ長調・イ短調の視唱(視奏)まで学習するが、その続きの読譜のための学習活動が、中学校の教育内容には存在しないのである。児童生徒は移動ド唱法による読み方を長く経験するが、その後、読譜のための学習活動

を特におこなわないのであるから、保育者養成校に入学してきたピアノ初心者の学生が、読譜を苦手とするのは、当然である。

幼児が園生活の中で、自然に音に対する感性を身につけられるような音楽活動を展開できる保育者の養成のために、最初の一步である読譜は、やはり重要である。

2.2. 保育者養成校における読譜力養成のための取り組み

本節では、読譜力養成のための取り組み事例を紹介する。

二宮(2021)、野口・中島(2015)、井本(2012)は、毎回の授業始めに、ト音記号とヘ音記号の譜表に音符がランダムに書かれたワークシートを継続して実施し、学生の音高を読み取る力がついたことを報告している。井本(2012)は、それぞれの音高を記入するだけではなく、前の音に比べて何度上がったか、または下がったかについても矢印と数字で記入するようにした。幼児の場合は、図形的処理によって感覚的に音高を覚えることができるが、学生の場合は数理的処理によって認知的に、前の音との音高の違いを認識する必要があるという(同上)。

齊藤(2019)は、担当する「音楽Ⅰ」～「音楽Ⅳ」を通して、読譜力養成のための学習活動を展開している。「音楽Ⅰ・Ⅱ」では、時間制限を設けてランダムに並んだ音符を読む練習をワークシートでおこない、特に「音楽Ⅱ」では、多くの学生が苦手とするヘ音記号の譜表の音符や、上下に加線を付いた音符を中心に出题するという(同上)。「音楽Ⅲ」では、J-POPや子どもの歌、わらべうた等、学生が耳にしたことのある楽曲を、初見演奏でも取り組みやすいリズムや調に直した楽譜にし、片手で初見演奏することを課す(同上)。また、リズム唱にも取り組み、グループ毎に、その日に練習する箇所を伝え、学生達がお互いに教え合いながら課題のリズム唱ができるようになったら、教員のチェックを受けるという、アクティブラーニング的な学習活動をおこなっている(同上)。「音楽Ⅳ」では、音符だけではなく、様々な情報が盛り込まれた楽譜を使用し、それを瞬時に読み取る練習をおこない、リズムに関する取り組みとしては、リズムアンサンブルやボディパーカッション、ボイスパーカッションなどを取り入れているという(同上)。練習を始める前に、「初見演奏をするための今日の目標」を考え、特に注意する点や意識する点などをあきらかにしてい

る(同上)。一度の範奏の後、1分～1分半程度の個人練習時間を取り、全員で合わせるが、途中までしか弾けない場合も、曲が終わるまで楽譜を目で追いつけるようにし、「楽譜を見る」ことを意識づけしている(同上)。第4回以降の取り組みでは、1曲目がメロディー、2曲目が伴奏となるような楽譜で構成し、最後に2曲を合わせて弾くと簡単なアンサンブルになるよう工夫しているという(同上)。その結果、音名を振らずに音符を読むことやピアノを弾く際に手元ではなく楽譜を見ること、楽譜は弾いているところよりも少し先を見ることなどが身についてきたという(同上)。

齊藤(2019)の実践は大変参考になり、すぐにでも取り入れたい活動である。筆者が担当する器楽演習の授業では、弾きたい課題曲のメロディーを音名唱することによる読譜訓練しかおこなっていないため、へ音記号の譜表に書かれた音符、及び音域の広い採用試験課題曲のピアノ伴奏パートの楽譜を、読む力はつかない。やはり、読譜に特化した教材を準備し、短時間、毎回の授業で読譜学習を継続的に実施する必要があると考える。

3. MuseScoreを使用した授業実践

MuseScoreは、オープンソース⁵⁾の楽譜作成ソフトで、音源を手書きで採譜した後の清書の段階で、筆者は長く利用してきた。手書きの楽譜は読みづらく、MuseScoreで楽譜を作成するプロセスは、筆者の場合、ライブ演奏の準備に欠かせないものとなっている。他のソフトと比較したことはないが、反復された同じ内容はコピー入力でき、作成した楽譜を好きな速さで再生、確認できるところが便利である。

図1下段左の「N」をクリックすると五線譜に音符を入力することができる。その時併せて、その右にある音価を表す音符や休符を選択する。



図1：画面上部の音価等を選択する箇所

慣れると操作は簡単で、いつも音価に注意を払うようになる。左側には、音部記号、調号、拍子記号など楽譜作成に必要な記号がプルダウンで選択できるようになっている。

授業は読譜力養成を目的におこない、流れは以下の通りである。

①図2のような、五線譜にある全音符の音高を確認する。



図2：課題例

②図3のようなリズム譜を、手拍子する。

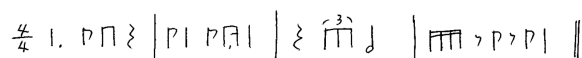


図3：リズム譜課題例

③MuseScoreをダウンロードする。

④使い方を試す。

⑤図4の「忍たま乱太郎」の右手メロディーの音名つきリズム譜を、ト音記号の五線譜に入力する。

⑥図4の○で囲んだコードの根音を中心に左手伴奏をつかって、へ音記号の五線譜に入力する。

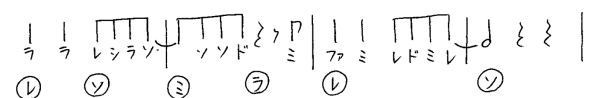
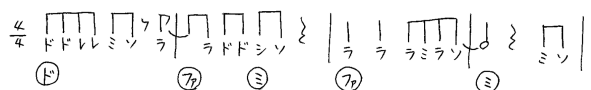


図4：「忍たま乱太郎」のMuseScore入力課題

⑦再生して発表する。

4. 結果と分析

①の活動では、音符が読めない、わからないと言っていた学生も、すぐに音高を読むルールを理解し、正しく読むことができていた。

②の活動は、意図的に難しくしたこともあり、読むことに苦労している様子が見られた。器楽演習の授業では、学習プロセスとして最初にリズム読みをおこなうことになっているが、「四分音符＝タン」「八分音符＝タ」というように児童が読む方法を採用している

ため、言葉の感覚でしか音価を理解できていないものと思われる。リズム譜を見ながら数字を用いて音価を確認し、手拍子する方が、学生には定着しやすいのではないだろうか。

③④はすぐに実行でき、問題なく入力の方法を理解した。

⑤右手の音符の入力に際しては、音価を選択してから五線譜の対応する位置に音符を置くが、タイの操作もあり、手間取っていたようだ。

⑥左手の伴奏は、コードの根音を示し、その5度上、または4度下の音を組み合わせると、動きのある伴奏になること、またメロディーと同じ音はなるべく避け、3度、6度の音程になるように音を選ぶと響きが柔らかくなることを助言した。「正しい音」ではなく「かっこいい音」を、キーボードを鳴らして確認しながら、試行錯誤して選ぶ様子が見られた。

以下にAさん、Bさん、Cさんが作成した楽譜を掲載し、特に創作したへ音記号の伴奏パートについて分析し、その工夫を述べる。



図5：Aさんの楽譜

図5：メロディーは概ね正しく入力できているが、最後の音符だけ、二分音符ではなく八分音符になってしまった。左手は、根音と5度音を用いた動きのある伴奏から始まるが、2、3小節目は3度音をメロディーに重ね、対位法⁶⁾的な音の動きとなっている。4小節目は、3小節目後半の音型を反復させ、非和声音を用いた「かっこいい」音使いになるように工夫されている。続く5小節目も根音に対して3度音を選び、4度の進行が繰り返されている。6小節目4拍目ウラから音域が下がる前の右手「ド」を強調するために、左手には重音を用いている。時間切れで最後まで作ることはできなかったが、3、4小節目に時間をかけ、⑦の活動では満足している様子であった。



図6：Bさんの楽譜

図6：右手は1小節目4拍ウラからかかるタイが1箇所抜けたが、苦勞なく入力できていた。左手は2拍ずつ同じ音で無難に進行し、3、4小節で変化をつけている。3小節目は「ファ・ド・ファ・ファ」とする方が一般的だが、そこまで2音ずつ同じ音で進んできたため、「ファ・ファ・ド・ファ」としたのであろう。4小節目の半音進行は、「ソ・bソ・ファ」あるいは「ソ・#ファ・bファ」とするのが一般的だと思われるが、「ソ・ファ・ミ」と入力した後、右手の「ミ」に受け渡すところを工夫して変化させたものと推察される。結果として、4つの半音が連なり、響きとしておもしろくなったのではないか。5、6小節は動きがそろい、7小節目は右手に合わせて音域を下げ、3度の音程を保ちながら対位的に動いている。全体的には基本に沿った、まとまりのある印象を受ける。



図7：Cさんの楽譜

図7：右手のタイや休符の入力に少し手間取っていたようである。左手は、リズムを変化させることで、Aさん、Bさんとは異なる緩急ある伴奏になっている。1、2小節は、示したコードの根音で始まるが、2小節目のリズムを付点に変えることで軽快な感じを出し、続く3小節目右手3つめの「ラ」の左伴奏音は弾き直さずに、その後の八分音符「ドドド」で勢いをつけることにより、流れに大きな変化を生じさせている。4小節目、付点四分音符→四分音符→八分音符で拍の頭ではなくウラに伴奏音を入れているところは、メロディーに動きがない分、伴奏のずれたリズム

が強調され、洗練された感じを受ける。6, 7小節目は、メロディーが八分音符4つの箇所では四分音符、休符の多い箇所、あるいは四分音符2つの箇所では付点のリズムを採用し、単調にならないための工夫が見られる。8小節目は、付点四分音符→四分音符→八分音符3つから成り、メロディーがなくなる箇所で、次のまとまったフレーズに向けたつなぎの役割を、左手がしっかりと果たしている。そしてこの「八分音符3つ」が、次に向かうエネルギーを表現している。

以上、3人の学生が作成した楽譜を分析した。

5. まとめ

今回の授業実践は、試行錯誤しながら創意工夫する創造的な学習活動であったといえる。

現在、器楽演習Ⅰ・Ⅱの授業で使用している教材⁷⁾の学修方法によれば、①楽典ワークシート学修(楽譜に記された音符、音価、リズム、音楽用語、記号、コードの把握)、②旋律のリズム唱、リズム打ち、階名唱、指使いの確認、その後、片手奏→片手奏+歌、両手奏→両手奏+歌、という順序で課題を仕上げることになっている。この学修プロセスは、楽譜に書かれた音符や記号を正しく止まらずに再現するという、ある意味、単調な作業、訓練の連続である。正解があって、それを実現することが授業の目的にもなっている。まず音符や記号があり、読んで理解したら即座に指を動かすという身体的プロセスに移さなければならない。そして、歌うことも同時に求められる。歌うときには、ピアノ演奏とは別の身体機能を使うため、楽譜を読んで、同時にピアノも弾いて、歌うという活動は、ピアノ初心者の学生にとって、かなりの負担になると推察される。また読譜については、グループレッスンの中で徹底しておこなうことができているか疑問である。筆者の場合、これまですぐに範唱し、学生が耳で歌を覚えるように進めていたが、その点は今後改めなければならない。

今回のMuseScoreを使用した読譜のための学習活動は、自分のペースで、自分のやり方で進めることができる。今回共通の曲に取り組んだが、個別に自分の好きな曲で楽譜を作成することも可能である。音符を読むだけでなく、音価を選択して五線譜上に入力する作業は、音高・音価を確実に覚えることを可能にする。そして範唱を聴いたり、他の学生の音名唱に何となく合わせて歌う時と違い、学生がそれぞれ自分で入力しなければ完成しないため、着実に力がつくものと

思われる。設定した速さで、作成した楽譜を再生することができ、MuseScoreは、試行錯誤しながら楽譜を作るプロセス特に自由にアレンジする場合に最適である。歌に合う自分流の伴奏を考えるプロセスは、主体的、創造的な活動であり、結果的に達成感、満足感を得ることに繋がると確信する。今後は、器楽演習Ⅰ・Ⅱの授業においても、今回MuseScoreを使っておこなったような主体的、創造的な学習活動を増やしていきたい。そして、教具として標準的に、MuseScoreが活用されることを待ち望む。

注

- 1) 勤務する大学の保育者養成課程で、公立園就職を目指す学生に対して、主に学科教員が支援をおこなうグループ。
- 2) 文部科学省(2017)『幼稚園教育要領』
- 3) 任意の音の絶対音高を瞬間的に知覚することができる聴力のこと。『新訂標準音楽辞典』
- 4) 文部科学省(2017)『中学校音楽科学習指導要領解説』
- 5) プログラムの具体的な表現であるソースコードを公開し、自由に改変することを認めるプログラムのあり方。
<https://kotobank.jp/word/%E3%82%AA%E3%83%BC%E3%83%97%E3%83%B3%E3%82%BD%E3%83%BC%E3%82%B9-2007> (閲覧日2021年11月22日)
- 6) 右手がメロディー、左手がコード伴奏という方法ではなく、左手も右手に対する対旋律を構成するようにつくる方法。音の流動の横の線を対象とする作曲技法。『新訂標準音楽辞典』
- 7) 『わかりやすい! 学びやすい! コードでかんたん! 保育のうた』

引用・参考文献

- 大地宏子(2008)「保育現場で求められるピアノ/音楽技能とは何か? - 保育者養成校におけるピアノ教育の有り様の再考のために」鶴見大学紀要第3部 保育・歯科衛生編第45号, pp.11-20
- Dorothy. T. McDonald & Gene M. Simons (1999)『音楽的成長と発達』溪水社, pp.43-63
- 堀内久美雄編(2008)『新訂 標準音楽辞典』音楽之友社
- 古田庄平(1978)「音楽学習における楽譜とその読譜指導」長崎大学教育学部人文科学研究報告 第2分

- 冊, 25, pp.163-172
- 井本英子 (2012) 「音楽的基礎力向上手法の実践と考察」 夙川学院短期大学教育実践研究紀要2012, pp.10-16
- 磯部澄葉 (2019) 「保育者養成課程における音楽制作Ⅱ - 楽譜作成を通じた読譜力の育成 -」 金城学院大学論集人文科学編第15巻第2号, 1-11
- 水戸博道 (2009) 「読譜のメカニズム」 音楽教育実践ジャーナルvol.7, No.1, pp.124-130
- 文部科学省 (2017) 「幼稚園教育要領」
- 文部科学省 (2017) 「小学校音楽科学習指導要領解説」
- 文部科学省 (2017) 「中学校音楽科学習指導要領解説」
- 中野研也・河野久寿 (2012) 「保育現場で必要とされる音楽能力と、幼児音楽教育との関連」 仁愛女子短期大学研究紀要第44号, pp.71-78
- 二宮貴之 (2021) 「保育者・教員養成校における音楽指導に関する一考 - 基礎的な読譜力育成に向けた取り組み -」 聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要, No.19, pp.41-50
- 野口美乃里・中島加奈 (2015) 「ピアノ学習に必要な諸能力に関する研究Ⅰ - 譜読み力に着目して -」 西九州大学短期大学部紀要第46号, pp.33-45
- 尾見敦子 (2009) 「提言『読譜教育』の4つの視点」 音楽教育実践ジャーナルvol.7, No.1, pp.76-86
- 齊藤淳子 (2019) 「教員・保育士養成課程における音楽指導に関する実践的研究：読譜力向上を目指す取り組みについて」 川口短大紀要第33巻, pp.117-131
- 梅本堯夫 (1999) 『子どもと音楽』 東京大学出版

楽譜

- 高崎展好 (2018) 『わかりやすい！学びやすい！コードでかんたん！保育のうた』 環太平洋大学